社会科学の視点を通じて グローバルに活躍する人材を育てる。これが学習院大学の社会的使命であり役割

守島 基博 氏（学習院大学副学長） × 乾 友彦 氏（学習院大学 国際社会科学部長） ＋ ファシリテーター：寺澤 康介（ProFuture代表取締役）

2016年に開設された学習院大学国際社会科学部では、「国際社会で活躍するビジネス人材を輩出する」というビジョンを掲げ、すべての学生が高度な英語力はもちろん、世界中の人と対等に渡り合える実践的なビジネススキルを習得することを目指している。果たして、どのようなポリシーのもと、どのようなグローバル人材を育てているのか。副学長・守島基博氏と国際社会科学部長・乾友彦氏にお話を聞いた。

グローバル企業が求める能力は「課題発見・解決力」

寺澤　2016年に設置された国際社会科学部は、学習院大学にとって52年ぶりの新設学部だと伺っています。設置にあたり、どのような背景や経緯があったのでしょうか？

乾　学習院大学全体としてグローバル化を進めていきたいという大きな目標がありました。一方で社会の要請として、グローバル人材を供給していくことが、これからの大学の役割の一つと捉えていました。この2つのミッションに対して、既存の学部で取り組むだけではなく、新たなフラッグシップとして先進的かつ牽引役を担う学部を作ろうと考えたのが、国際社会科学部を新設した経緯です。

守島　大学全体がグローバル化を目指すという流れの中で、従来型の英語教育や海外研修（留学）だけでは、真のグローバル人材は育てられないのではないかと判断しました。また、学習院大学なりのグローバル人材を考えた時に、重要なのは、基盤として社会科学的な思考力を持った人間です。そういった学生を一人でも多く社会へと輩出していくことが、国際社会科学部の使命だと考えています。

寺澤　企業がグローバル人材に求めている能力とは、どのようなものなので

しょうか？

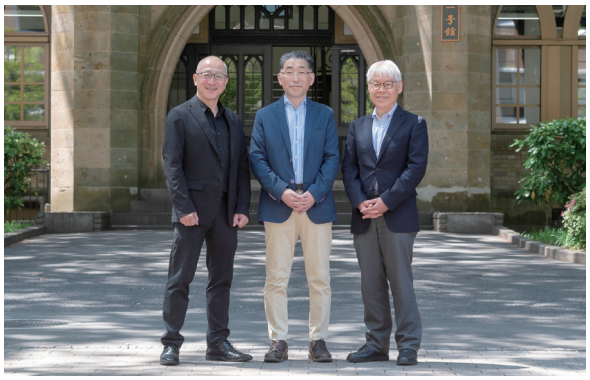
乾　学習院大学の卒業生が入社した海外と取引のある65社に対してアンケートを実施したところ、学生に求める能力は「課題発見・解決力」が96.9%と圧倒的に多く、次いで「国際経済・社会に対する理解力」、「英語によるコミュニケーション能力」となっています。

守島　企業が求めているのは、単に「英語が話せる」、「交渉力がある」だけの人材ではありません。ビジネス上の問題や課題を見つけて、分析し、それを解決まで結びつけていける力、それこそがビジネスパーソンの基盤なのです。そういう意味では、国際社会科学部の取り組みは、企業のニーズに合っていると思います。

寺澤　国際社会科学部が社会に送り出したいグローバル人材像とは、具体的にどのように定義されているのでしょうか？

乾　ひと言で表すなら、『グローバル化を推進するリーダーシップを持った人間』です。最近の学生は、外資系企業や日本企業の中でも先端的なIT系企業などを目指す傾向にあるのですが、そういった企業はグローバルな競争が厳しく、常に新しいマーケットを開拓し続けなければなりません。そのためには海外、現地の人々と十分なコミュニケーションを取り、論理的な根拠を持って説得する能力が問われます。そうした能力を基礎力として携えたうえで、社会に出た後、早期に実践で活躍できるような人間を送り出していきたいと考えています。

守島　例えば、ある企業がアジアの市場を開拓する際、プロジェクトリーダーは、その国の状況や人々の暮らしをあらかじめ理解し、そのうえでデータを分析することなどが必要になります。国際社会科学部の強みは、そういったグローバルな視点と現場の視点（グローカルなものの見方）を、もちろん完成形ではありませんが、社会に出る前にある程度、身につけることができるところでしょう。



企業が求めている能力
（海外と取引がある65社の人事担当者の回答）

Q 貴社が新卒採用で大学生に求めた能力を教えてください		
1位	課題発見・解決力	96.9 %
2位	国際経済・社会に対する理解力	46.8 %
3位	英語によるコミュニケーション能力	46.8 %

（複数回答可）2014年12月・学習院大学調べ

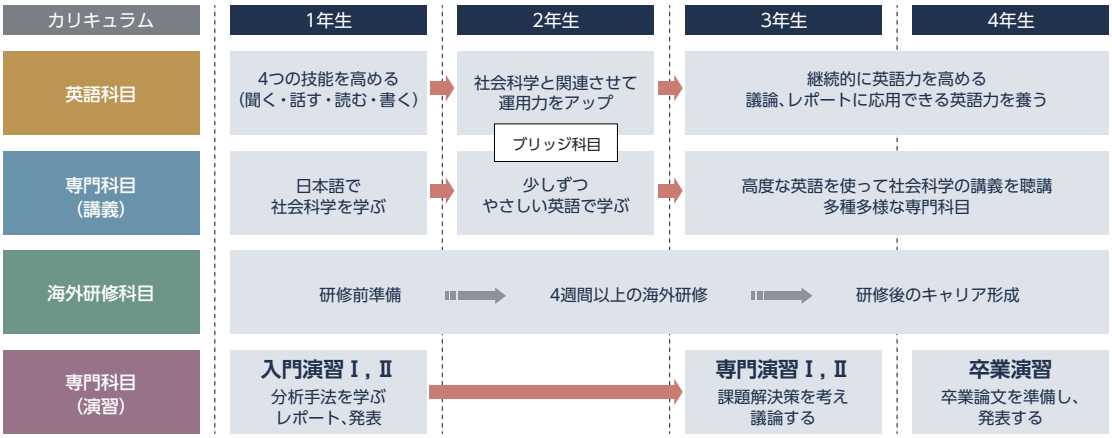
独自の学習システムや海外研修（留学）制度など“自立力”を養うカリキュラム

寺澤　国際社会科学部では、そういった能力を習得するために、より実践的な学習を提供されているそうですが、カリキュラムの内容や特徴についてご説明ください。

乾　私たちが重視しているのは、広い意味でコミュニケーション能力を高めることです。グローバルな場でのビジネスコミュニケーションには英語力が不可欠ですが、同時に自分の考えを論理的に、データの裏付けを持って伝えることも求められます。そこで1年目は英語教育を徹底し、2年目以降は英語を使って実践的な社会科学（法学・経済学・経営学・地域研究・社会学）を学習します。同時に、企業からのニーズの高い「課題発見・解決力」を養う演習も行います。それら英語教育と専門教育を結合させる取り組みが、「CLIL（クリル）」と「ブリッジ科目」です。

「CLIL（クリル）」とは英語学習の手法で、専門科目（社会科学）に関する内容を英語で学習することで、実践的な英語力

国際社会科学部の4年間のカリキュラム概念図



自分の中に眠っていたポテンシャルに気づき、まるで別人のように変わっていったのです。 ―― 乾

を高めます。一方の「ブリッジ科目」は、2年生の2学期から英語で専門科目（社会科学）を学ぶ際、スムーズに英語の授業へ移っていけるように橋渡しをする科目です。また、教壇に立つ教員陣の顔触れも、年齢、性別、国籍のダイバーシティに配慮し、実社会で豊富な経験を積んできた人材を揃えております。

寺澤　カリキュラムのもう一つの特徴として、4週間以上の海外研修（留学）を義務付けているそうですね。

乾　はい。私たちの海外研修（留学）は、自分で作るオーダーメイドなのが特徴です。多くの大学では、決められた国の、決められた大学で、用意されたプログラムをこなすような、レディメイドタイプの海外研修（留学）を行っています。これでは、旅行気分で終わってしまうケースもあるでしょう。一方、国際社会科学部では自分が何を学びたいのか、そしてそのためにはどこの国に行き、どういうプログラムを、どのくらいの期間学べばいいのかを学生自身で考えなければなりません。

守島　オーダーメイドは「一人ぼっちで行く」海外研修（留学）で、これがレディメイドタイプとの大きな違いです。例えば、現地の提携校に何十人も送り込むと、海外研修（留学）期間中はずっと日本人同士でいることになります。しかし、オーダーメイドだと、周りはみんな外国人で、勉強も生活もすべて自分で何とかしなければなりません。それが学びにとっては非常に重要なのです。

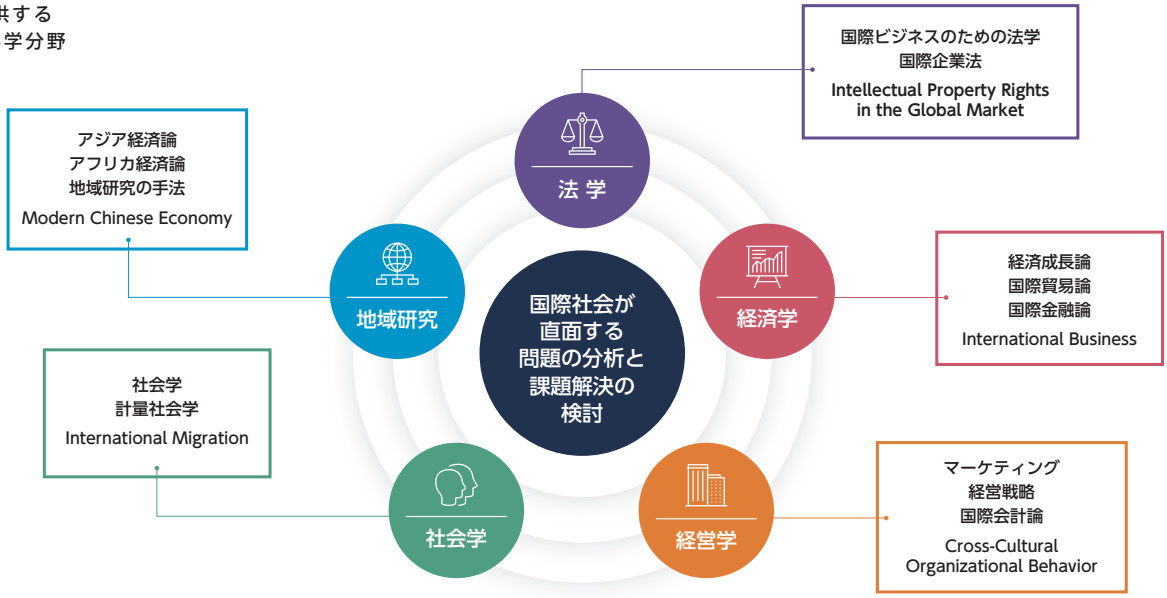
寺澤　まさに成長を促す「ストレッチ」ですね。厳しい経験させることで、学生自身が変容、成長していくと。実際そういった経験を経て、ガラっと変わった学生も多いのでは？

乾　ある学生は、ある程度英語の点数が高かったので入学後は上級クラスに配属させたのですが、やや消極的な性格で、当初は上級クラスへの配属や海外研修（留学）などに戸惑っていました。しかし、学習を重ね、海外研修（留学）なども経験するうちに、それまで自分では気づかなかったようなグローバルな適応力や、自分の中に眠っていたポテンシャルに気づき、まるで別人のように変わっていったのです。就職活動では、外資系のIT企業などを志望していますが、とても順調で、入学した頃からすると、本人も思いもしなかったような進路を歩み始めています。

守島　大学における学習において重要なのは、自分でも知らなかった能力に気づき、のばしてあげることです。学生時代は、先の例のように何かを与えられると、気づきを得てパッと開花することが多くあります。そして面白いと感じると、より積極的に学び、さらに成

重要なのは、自分でも知らなかった能力に気づき、のばしてあげることです。 ―― 守島

本学部が提供する
5つの社会科学分野



その他複数の社会科学の分野にまたがる講義がある（世界の貧困問題、国際開発論等）

長していく。大学というのは、そういうスパイラルを回し続けることが何より重要なのです。学生たちの隠れた能力をいかに開花させてあげられるか、それが私たちの役割だと思っています。

学び続ける力と一歩前に出る勇気を持ってほしい

寺澤　2020年3月、国際社会科学部の第1期生が卒業を迎えますが、社会へと出ていく学生たちにどのような活躍を期待されていますか？

乾　私たちが一番期待しているのは、学生時代に身につけた学び方を活かして、学び続けてほしい、ということです。残念ながら、大学の授業で学んだことの多くは、やがて陳腐化していきます。学んだ知識は常にアップデート、さらにはアップグレードし続けなければなりません。変化の激しい時代において、自分の考え方を柔軟に変えながら、常に新しいことを学び続けられる人になることを期待しております。

守島　私は、一歩前に出る勇気を持ってほしいと思っています。と同時に、前に出たときに後ろを振り返って、みんなを導けるような人になってほしい。一歩前に出る勇気と、周りを巻き込む力。その両方を兼ね備えて初めて、組織人として完成されるのではないでしょうか。極端な言い方をするなら、英語など後からいくらでも勉強できます。しかし、そういったマインドセットは若いうちに鍛えたほうがいいのです。

寺澤　今後この学部をどのように進化・発展させていきたいとお考えでしょうか？

乾　時代によって社会の要請も変わり続けますので、その都度フレキシブルに応えられるような体制を整えていきたいと考えております。特にAIやロボットが急速に進化している昨今、人間に求められるスキルとは何なのかを、我々も、そして学生自身も考える必要があるでしょう。今後も新しい時代の要望や技術に適応し、絶えず変化し続けられるような人間を育てていきたいと思っています。

守島　AI時代のキーワードは、「共感」です。他人の言っていることを単に言葉として理解するだけでなく、シンパシーを持って理解してあげる。それはAIやロボットにはできない、人間だけができる最後の砦でしょう。共感力のある人材を育成することは、私たちの大学にとっても、そして社会にとっても大きな課題ですので、その点を意識した教育を、国際社会科学部はもちろん、学習院大学全体として大切にしていきたいと考えております。

一歩前に出る勇気と、周りを巻き込む力。その両方を兼ね備えて初めて、組織人として完成されるのではないでしょうか。
―― 守島

守島 基博 氏
学習院大学副学長／経済学部教授

1986年 米国イリノイ大学産業労使関係研究所博士課程修了。人的資源管理論でPh.D.を取得後、カナダ国サイモン・フレーザー大学経営学部Assistant Professor。慶應義塾大学総合政策学部助教授、同大大学院経営管理研究科助教授・教授、一橋大学大学院商学研究科教授を経て、2017年に学習院大学経済学部経済学科教授に就任。2018年より副学長を務める。厚生労働省労働政策審議会委員などを兼任。著書に『人材マネジメント入門』、『人材の複雑方程式』（共に日本経済新聞出版社）、『人事と法の対話』（有斐閣）などがある。

乾 友彦 氏
学習院大学 国際社会科学部長／同学部教授

1985年 一橋大学経済学部卒業後、日本政策投資銀行入行。1990年 アメリカ・ジョンズ・ホプキンス大学経済学部修士課程修了（経済学修士号取得）。日本大学経済学部助教授・教授を経て、2006年 一橋大学経済学研究科博士後期課程修了（単位取得退学）。2009年より内閣府統計委員会担当室室長、日本大学経済学部教授を歴任し、2014年に学習院大学国際社会科学部開設準備室教授に就任。2016年に同学部教授となり、2019年より現職。専門領域は生産性、経済発展論、国際経済学。

寺澤 康介
ProFuture株式会社 代表取締役、HR総研所長

1986年 慶應義塾大学文学部人間関係学科卒業後、文化放送ブレーン入社。2001年 文化放送キャリアパートナーズを共同設立。常務取締役を経て、2007年 採用プロドットコム株式会社（現ProFuture株式会社）設立、代表取締役社長に就任。2012年 HR総研所長に就任。